

実証分析による 20 世紀の交響楽団におけるレパートリー形成とその要因の国際比較研究

井上 登喜子 / INOUE, Tokiko

文教育学部芸術・表現行動学科

■専門分野 音楽学
■キーワード 音楽学、音楽受容、レパートリー形成、合唱活動、オーケストラ演奏会

連絡先 inoue.tokiko@ocha.ac.jp

研究内容

■概要（背景・目的・内容）

音楽文化とその受容の諸相について、とくに十九世紀から二十世紀にかけてのドイツと日本における演奏会や合唱活動を中心に、音楽の場の形成や人びとの音楽的営みについて歴史的、および実証的に研究する。具体的には、
(1) 日本におけるオーケストラ演奏会の誕生と展開を実証的に捉えるために、戦前・戦後の資料研究に基づく歴史的研究、ならびにデータベース構築と統計手法に基づく実証研究という二つのアプローチから、演奏会形成とレパートリー形成について分析・研究している。
(2) 日本、ドイツならびに複数の異なる国・地域のオーケストラ活動を対象に、演奏会形成と楽曲需給のメカニズムに関する国際比較研究を行っている。
(3) 十九世紀ドイツの都市で誕生し、普及した合唱協会について、日本や他国への伝播も視野に入れて、その活動の音楽的側面と社会的側面について考察している。

■応用・将来展望

私は現在、日本及び海外の交響楽団の演奏レパートリーの決定要因の実証研究を行っている。現時点では、ファクトファインディング研究の段階であるが、その中から将来の発展的研究テーマが浮かび上がってきている。それは、異なる文化における演奏レパートリーの需給メカニズムの相違点の研究である。文化的側面では、たとえば不確実性回避の傾向が高い文化圏では、聴衆の嗜好の保守化と交響楽団のハーディング行動などによりレパートリーの固定化が進み、不確実性を受容する文化圏では新たな楽曲への挑戦によりレパートリーの拡散化、不均一性が進むというものである。文化的側面や心理的傾向は、法学や経済学の分野でもその影響に注目が集まっているが、音楽受容という文化や心理の影響を直接うける分野では、意外にも明示的にその違いを示した研究は少ない。課題は文化や心理をどのように客観的に計測できるかであるが、これは今後の研究で示していきたい。

■活動実績

主要研究成果

マーク・エヴァン・ボンズ著、近藤謙・井上登喜子訳、『「聴くこと」の革命：ベートーヴェン時代の耳は「交響曲」をどう聴いたか』、アルテス・パブリッシング、2015.10
井上登喜子、「ベルリン・フィルのレパートリーの実証研究：首席／客演指揮者のレパートリー形成」、お茶の水女子大学人文科学研究、第11巻、149-163頁、2015.03
井上登喜子、「ベルリン・フィルのレパートリー形成における指揮者の役割：客演指揮者と地域的多様性」、民族藝術、32号、2016
井上登喜子、「19世紀ドイツと合唱：ひと・空間・民族をつなぐ合唱活動」、民族藝術、32号、2016
井上登喜子、「マリ－フォン・リンデマンの回想録からみるシューマンと合唱協会の活動」、お茶の水音楽論集、18号、2016